10 月 23 日のメッセージ

聖書：ヨブ記　38：　1－18

「そのすべてを知っているなら」

教会暦は降誕前節を迎えました。降誕前節は、歴史を通して働かれる神に改めて思いを寄せる時です。だから、礼拝の中で朗読される聖句も旧約聖書が中心となります。

その最初に思いを馳せるのは、「主は命じられ、すべてのものは創造された」(詩編 148:5)ということです。「そんな当たり前のことを」と思うかもしれません。

しかし、実際、パウロの起こした奇跡(「リストラに、足の不自由な男が座っていた。……パウロは彼を見つめ、……『自分の足でまっすぐに立ちなさい』と大声で言った。すると、その人は躍り上がって歩きだした。」使徒言行録 14:8-10)を目の当たりにした群衆は、パウロとバルナバを神の化身と誤解しました(「群衆はパウロの行ったことを見て声を張り上げ、リカオニアの方言で、『神々が人間の姿をとって、わたしたちのところにお降りになった』と言った。」使徒言行録 14:11)。聖書を、神を知らなければ、神のなされた創造は常識ではありません。神ならぬものを神としてしまいます。

だからパウロは、すぐに群衆を諭します。自分たちは「生ける神に立ち帰るように福音を告げ知らせているのだ」と。そして、まず、この神こそが万物の創造主であり、私たちは被造物に過ぎない、と告げるのです(「……わたしたちも、あなたがたと同じ人間にすぎません。あなたがたが、……生ける神に立ち帰るように、わたしたちは福音を告げ知らせているのです。この神こそ、天と地と海と、そしてその中にあるすべてのものを造られた方です。」使徒言行録 14:15)。その関係性の中でこそ、神に全てを委ねることができる、と。

ところが、神が全てを創造されたことを知りながらなお、神に逆らうのもまた私たちの姿なのです。

神から「地上に彼ほどの者はいまい。」(「主はサタンに言われた。『お前はわたしの僕ヨブに気づいたか。地上に彼ほどの者はいまい。無垢な正しい人で、神を畏れ、悪を避けて生きている。』」ヨブ記 1:8)と言われたヨブでさえ、様々な試練に遭う中で神を疑います。3 人の友人との会話を通して、その疑いはさらに大きくなります。そして、神に対して傲慢に振る舞うのです。「私はこれまで神の定められた掟を守ってきた。ならば、それに応えるのが神の務めではないか」(「わたしの歩みの一歩一歩を彼に示し／君主のように彼と対決しよう。」ヨブ記 31:37)と。これは創造主である神を試す、神に挑戦するという傲慢です。

それに対する神の応答はシンプルかつ的確です。「わたしが大地を据えたとき／お前はどこにいたのか。知っていたというなら／理解していることを言ってみよ」(ヨブ記 38:4)。この世界の「そのすべてを知っているなら言ってみよ」(ヨブ記 38:18)。もちろん、それに応える術はヨブにも、そして私たちにもありません。

にもかかわらず、私たちはこのヨブのような問いを常に抱えているのではないでしょうか。「神よ、なぜ」と問うことのなんと多いことでしょうか。その多くは自己中心的な、利己的な問いです。

その度ごとに、神の「そのすべてを知っているなら言ってみよ」との声が聞こえてきます。しかし、それは私たちを突き放す言葉ではありません。むしろ、「思い悩む必要はない」(「あなたがたのうちのだれが、思い悩んだからといって、寿命をわずかでも延ばすことができようか。」ルカによる福音書 12:25)との呼びかけです。

「私があなたを造った。だから安心して私に委ねよ」(「それはみな、世の異邦人が切に求めているものだ。あなたがたの父は、これらのものがあなたがたに必要なことをご存じである。」ルカによる福音書 12:30)との呼びかけなのです。

苦しい時、厳しい時にこそ、創造主である神に立ち帰りましょう。